



寺田寅彦の随筆「無題（107）・化物の進化」の掲載について

今年（2016年）6月、理化学研究所の実験チームが発見した新元素 113 番について名前を「ニホニウム」とする案が公表されました。日本の国名と元素の語尾に付くことの多い「イウム」を組み合わせたということです。この快挙を記念して寺田寅彦の随筆から関連のありそうな部分を取り上げました。

このことは、朝日新聞の天声人語（2016年1月8日）にも「原子番号 30 の亜鉛の原子核を、同じく 83 のビスマスの原子核にぶつけて、くっつける。しかし、この核融合はめったに起きない。9年間続け、新元素が合成できたのはたった3回だという。気が遠くなる。しかも、この新元素は合成されても 0.002 秒で崩壊し、別の元素に変身する。それを捉えるのだからすごい技術である。森田さんらはさらに未知の領域に挑むという。なるほど、この世に『化物』は尽きない。」と掲載されています。

千葉明様の「寺田寅彦と親しかった津田青楓の懶畫房のことなど雑感」の掲載について

このたび、千葉様からご投稿いただいたものです。

千葉様は、以前、大森一彦様が津田青楓について書かれたものを読み、津田青楓に関心を持たれ、青楓から見た寅彦像と、青楓の著書「懶畫房草筆」の「懶」と「懶」の用い方について文献等から洞察されたことを示していただきました。パソコンの漢字一覧では登録されていない文字「懶」ですので、興味深いものと考えます。

四宮義正様の「寺田寅彦～定説・思い込み・気になること～（2）」の掲載について

四宮様からご投稿いただいたものです。

前号に引き続いて、寺田寅彦の作品や研究文献に関して、多方面の情報から提示していただいております。さらに、寺田寅彦を研究していくうえにおいて大いに参考となるものと考えます。

山田功様の『『凌霄花』と石盤』の掲載について

山田様からご投稿をいただきました。

寺田寅彦の作品「花物語」の中の「凌霄花」で、当時の子ども達は「石盤」を使っていたことがわかります。その「石盤」を入手されたようです。いつか、それを見せていただける日が来ると思いますが、それを見ながら、改めて「凌霄花」を読み進めて行くと、当時の寅彦の様子が明確化していくことができるのではないかと考えております。

寅彦の情報あれこれについて

中谷宇吉郎の弟、治宇二郎が旧制小松中学校時代に書き、芥川龍之介に高く評価され、長く行方不明であった「独創者の喜び」の朗読用テキストが作成されたことや多くの著書等が取り上げられています。今後もしろいろな情報をお寄せいただきたいと思います。

平成 28 年度 寺田寅彦記念館友の会 秋季研究会のご案内

平成 28 年度の秋季研究会を下記の日程で開催いたします。ご参加をお願いいたします。

日時 平成 28 年 1 月 2 月 4 日（日） 午後 1 時から 3 時まで

場所 寺田寅彦記念館

演題 「寺田寅彦先生に教わった事」 科学者の眼、彫刻家の眼

講師 彫刻家 大野良一様（新制作協会会員・日本美術家連盟会員・高知県展無鑑査、同理事）

現在、寺田寅彦の銅像を制作していただいております。大野様は、こり銅像の制作に関わり始めてから「椿」「藤の実」で 2 年連続新制作展新作家賞を受賞され、本年度の県展において、「アマアガリ」で県展大賞も受賞されています。これらの事を踏まえて、寺田寅彦像について語っていただけるものと思っております。ご参加をお願いいたします。